

近代文学研究叢書

第三十卷

昭和46年7月15日 印刷
昭和46年7月25日 出版
昭和48年10月20日 二刷出版

〔 ¥ 2 5 0 0 〕

著 者

昭和女子大学近代文学研究室

発行者

東京都世田谷区太子堂一丁目七番地
小林寅次

印刷者

東京都千代田区神田錦町二丁目十四番地
梶原忠幸

発行者

東京都世田谷区太子堂一丁目七番地
昭和女子大学近代文化研究所
振替口座 東京 一七〇八六七番
電話代表 (03) 五一三一 番

近代文学研究叢書

第三十卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

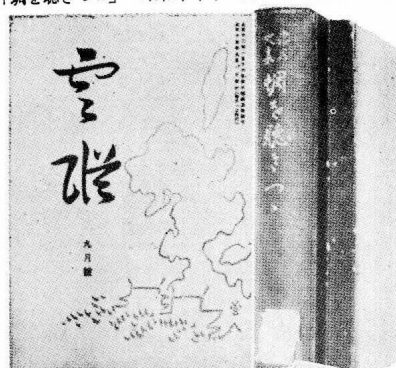
池石石 上太岡 片荻 金河 木坂 佐佐 山島 玉辻 内成 能浜 人保 本村 吉

田松 間見 勢瀬 井田 伯藤 沢[★]本 鱈子 桐原 田井 森田 田
坂 徳 藤村 宮 木由 俣 井保
澄定 久 円 頼正 幸 麗 梅 幹 美 八 五 実 健 頭 泉 三 磯 延 吉 亀

夫 孝 雄 都 吉 郎 賢 勝 瀧 鑑 助 二 允 友 二 明 郎 郎 修 英 二 智 水 生 郎 吉 男 貞 鑑

(国語学) (近代文学) (国文学) (近代文学) (美文学) (国語学) (近代文学) (仏文学) (英文学) (国文学) (比較文学) (英文学) (国文学) (文法学) (国文学) (独文学) (国文学) (英文学) (和歌文学) (歴史学) (英文学) (俳文学) (近代文学) (比較文学) (英文学) (児童文学) (国文学) (国文学)

「鯛を聴きつゝ」—昭和十年十一月刊（国会図書館蔵）



←露月自筆（露月会館蔵）

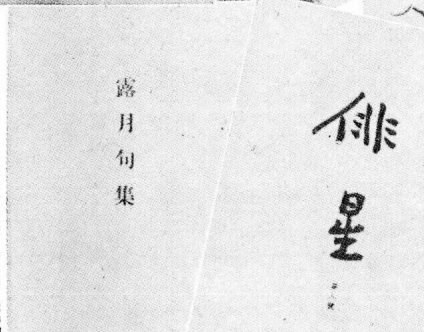
露月肖像



「子鶴親鸞」—大正十二年一月刊（石井かよ子氏蔵）✓

君は有りて亦風流
世に乾鯉も空人

↑雑誌「雲蹤」—大正十四年九月号（昭和女子大学蔵）



「桑弧」大正十二年十一月刊 中段中央、雑誌「俳星」—明治三十三年五月号（昭和女子大学蔵）



旧居（秋田県河辺郡雄和村女米木）

↑「露月句集」—昭和三十三年九月刊（昭和女子大学蔵）

露月の墓（秋田県女米木玉庵寺）

俳誌「三峨」大正八年三月号（露月会館蔵）

中段中一俳誌「俳星」—明治三十三年五月号（昭和女子大学蔵）

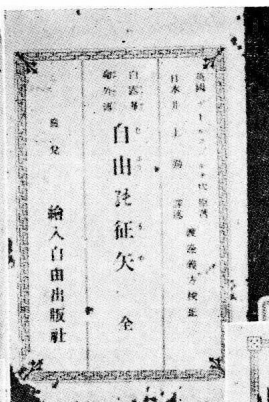
井 上 勤

勤の肖像（井上芳人氏蔵）



明治十八年十二月、父不鳴宛のハガキ

（井上芳人氏蔵）

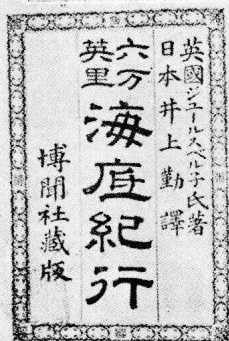


上段中、「自由の征矢」——明治十七年十月刊
上段左、「空中旅行」——明治十九年二月刊
（昭和女子大学蔵）

「魯敏孫漂流記」——明治十六年十月刊
（昭和女子大学蔵）



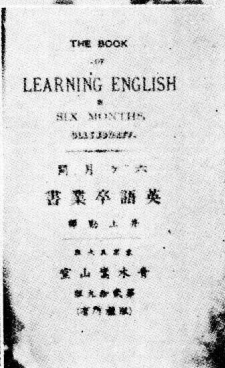
「人肉質入裁判」——明治十九年十一月刊
（昭和女子大学蔵）



「海底紀行」——明治十七年二月刊
（昭和女子大学蔵）



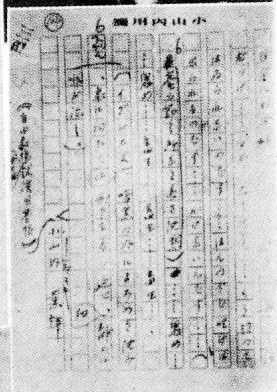
徳島県徳島市下助任町興源寺
内の井上家の墓



中段中一「新小説百万圓」
明治四十一年二月刊
（岩村武勇氏蔵）

「英語卒業書」——明治三十三年三月刊
（昭和女子大学蔵）

小 山 内 薫



多磨霊園にある薫の墓



小野のわかれ

→ 薫の詩や小説所載の雑誌「七人」創刊号

(昭和女子大学蔵)

上段中―同誌(明治三十八年九月)に所載の「小野のわかれ」

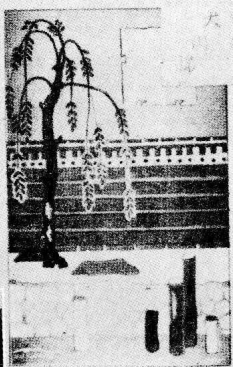
(昭和女子大学蔵)



第一の世界

→ 脚本「第一の世界」(新演芸 大正十二年一月所載)

(昭和女子大学蔵)



中段中―長編小説「大川端」(初版) 大正二年一月刊 (昭和女子大学蔵)



新思潮

薫が関係した第一次「新思潮」創刊号(明治四十年九月号)(昭和女子大学蔵)

自由劇場

市川左團次
小山内薫 共編

「自由劇場」一大正二年十月刊(昭和女子大学蔵)

上段右―薫の肖像(早稲田大学演劇博物館蔵)
中段右―薫の自筆原稿(同上)

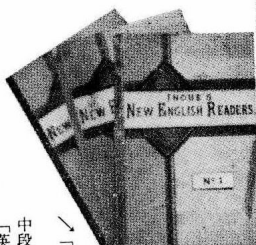
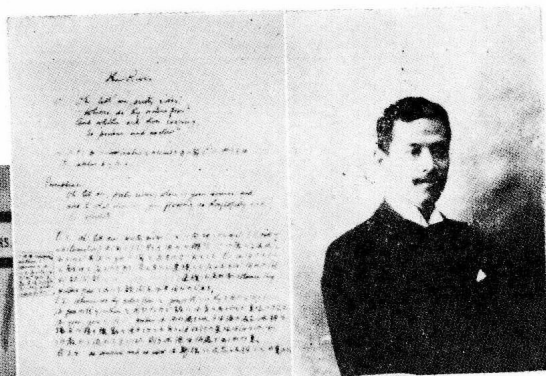
井 上 十 吉

上段右一十吉肖像 (井上當藏氏藏)

上段中一自筆 (加藤貞齊氏藏)

“New English Readers (5 vols)”—明

治三十五年四月刊 (再) (昭和女子大学蔵)



「井上和英大辞典」—大正十年二月刊 (五版)

(井上當藏氏蔵)

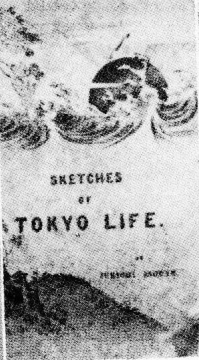
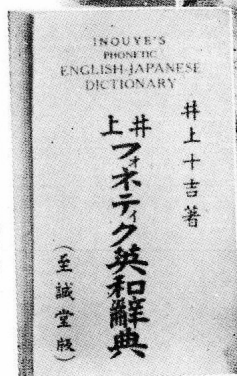
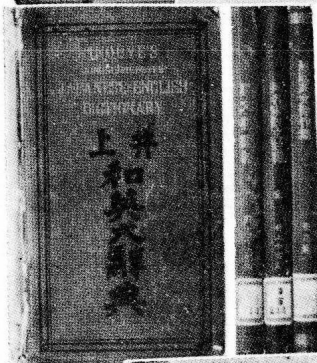
中段中「最近英文傑作集」—明治三十一年刊

「英名家散文註釈」—明治三十一年十二月刊 (再)

「英文典講義」—明治三十一年十二月刊 (再)

中段右「英語學講義録」八冊—明治三十年刊

(昭和女子大学蔵)



「井上フォネテック英和辞典」—昭和二年二月刊 (十五版) (井上當藏氏蔵)

下段右—“New English Composition”

一大正五年十二月刊 (再) (井上當藏氏蔵)

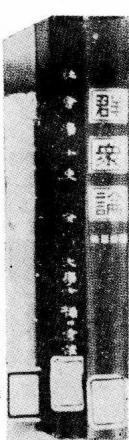
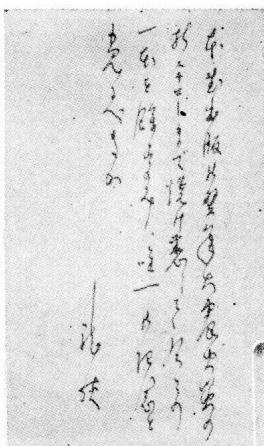
下段中央—「井上英和大辞典」—大正四年九月刊 (初) (井上當藏氏蔵)

“Sketches of Tokyo Life”

明治二十八年十一月刊 (井上當藏氏蔵)

樋口龍映

龍映肖像



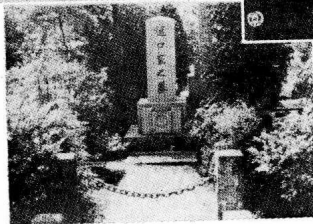
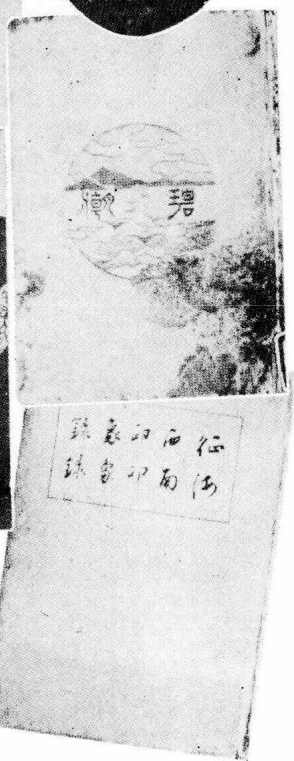
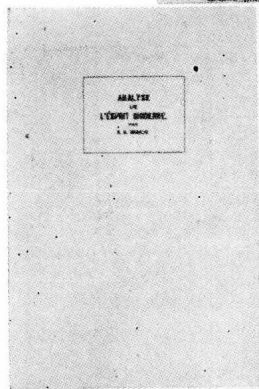
上段中「欧米うらおもて」(大一一・一〇刊)の扉
の龍映自筆

上段左「群衆論」—大正二年九月刊(昭和女子大学蔵)

「社会学小史」—明治四十四年八月刊(〃)

「社会論叢」—明治四十二年五月刊(〃)

中段左「近代思想の解剖」—大正二年一月刊(〃)



都立多磨霊園内にある樋口家の墓

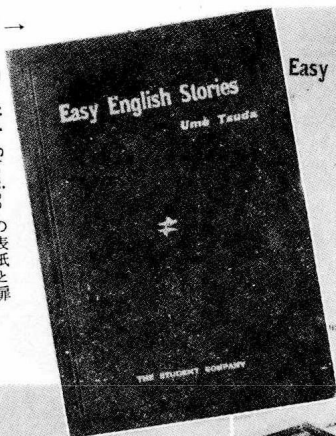
中段右「碧潮」—明治三十九年三月刊(昭和女子大学蔵)

中段中「時代と文芸」—明治四十二年三月刊(昭和女子大学蔵)

下段右「征西印象録・海南印象録」—昭和五年七月刊(樋口家蔵)

津 田 梅 子

→ Easy English Stories の表紙と扉
明治三十八年九月刊
（昭和女子大学）
上段右 梅子肖像



Easy English Stories

Umé Tsuda



GIRLS' NEW TAISHO READERS

BOOK FIVE

BY TSUDA KUMAMOTO



TOKYO



GIRLS' NEW TAISHO READERS

TSUDA KUMAMOTO

4

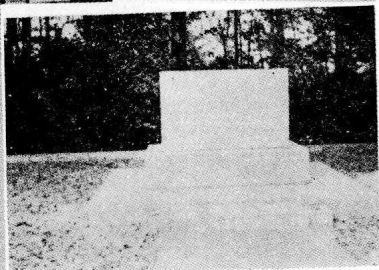
TOKYO KANEKAWA

Leaves from Japanese Literature

Umé Tsuda

津田梅子
南日似太郎註
國文花がたみ
英譯

「国文花がたみ」——明治三十九年三月刊
英訳
（昭和女子大学蔵）
中段中——当時の女子英学塾麹町五番町
の校舎



津田塾大学内にある梅子の墓
中段右と左

“Girls' New Taisho Readers, の表紙と扉
一大正十一年一月刊
（昭和女子大学蔵）

目次

口	第三十卷の成立	昭和女子大学近代文学研究室……(一〇)
凡	例	昭和女子大学編集室……(一五)
石	月	近代文学研究室……(一七)
井	勤	近代文学研究室……(二〇)
小	上	近代文学研究室……(二三)
井	山	近代文学研究室……(二六)
樋	上	近代文学研究室……(二九)
津	口	近代文学研究室……(三二)
近	龍	近代文学研究室……(三五)
代	梅	近代文学研究室……(三八)
文	子	近代文学研究室……(四一)
芸	表	近代文学研究室……(四四)
年	(90)	近代文学研究室……(四七)
付	記	近代文学研究叢書編集室……(五〇)

第三十巻の成立

本巻は昭和期第五巻として、昭和三年九月から昭和四年八月までに歿した左記六名の研究調査を収めた。

石井露月は明治六年（一八七三）五月十七日、秋田県河辺郡戸米川村に生まれた。少年期から漢文学に親しみ、祖父の影響をうけて発句を作った。脚氣のため秋田中学を退学、体力を養い上京。明治二十七年正岡子規の知遇を得て「小日本」に入社、ついで「日本」新聞に転じた。記者のかたわら神田の済生学舎の医学生となり医学を学んだ。又、子規門下として句作に精進し明治三十一年、子規をして「その句を見れば縦横奔放、藻思煥発、真に恐るべきあり、勉めて己まづば造指する所豈測るべけんや」といわしめるにいたった。碧梧桐、虚子、紅緑などと新進として活動、翌三十二年、脚氣療養と医術実習を目的に京都に六ヶ月滞在、京阪の俳人と交わり、十二月、生地の中に医を開業した。地方にあって島田五空らとはかり俳誌「俳星」を発行。ついで「互川」「三峨」に筆をとり、更に「雲蹤」「再現俳星」に力をそそぎ、選句に文章に意欲的で後進の指導をおしまなかつた。幻想的作風、東北地方の自然を詠じて「奥羽調」を主張、晩年は芭蕉に俳諧の真髄を見出し「超越」の人生観をとなえた。昭和三年九月、五十六歳で逝去。

井上勤は嘉永三年（一八五〇）九月十五日阿波徳島名東郡前川村に、藩医井上不鳴の長男に生まれた。彼七歳の折オランダ人ドンコル・コルチスについて英、仏、独語を学び、一時通弁となってドイツ領事館で独文筆写の仕事に携った。が、明治八年工部省電信局に勤務、のち大蔵省関税局（明一三）、文部省御用係（明一六）、参事院内務部（明二七）等につとめ官吏生活をしながら、ジュール・ベルヌの「月世界旅行」「ロンドン鬼談」トーマス・モアの「ユートピア」の翻訳「良政府談」など多くの外国文学の翻訳を公刊した。これらは、明治初期の日本文化建設に有力な支柱ともなつて多くの読者に歓迎された。

晩年は公職を退いて神戸葺合村に移住し、洋花の温室栽培に熱心であつた。また、三十五年にアメリカに渡り、帰国後種々な事業に着手したが成功しなかつた。しかし、語学の勉強には熱心で、晩年はエスペラント語も学んでいた。昭和三年十月、老衰で死去。享年七十八歳。

小山内薫は明治十四年（一八八一）七月二十六日広島市大手町一丁目旧津輕藩士、陸軍軍医の父小山内健の次男に生まれた。十八年父の死にあい、一家は上京、富士見町に居住。二十八年高等小学校二年から東京府尋常学校二年に入学、この頃篤亭金升到雑俳を学び、市川左団次と交わる。同窓の武林武想庵に影響されて軍人志望を断念し、文学に親しみ共に第一高等学校文科に入学、在学中失恋が動機で内村鑑三の門を叩きピュウリタニ生活に入り、純文学への視野を広めた。三十五年東京大学英文科に進み、小泉八雲や夏目漱石の教えを受ける。川田順、武林無想庵らと同人雑誌「七人」を発行、その特別号に詩作の「小野のわかれ」を発表、又「歌

舞伎」「帝国文学」などに劇評を発表、メートルリンクの戯曲「群盲」の翻訳が森鷗外に認められ、三木竹二を通じて伊井春峰を知り座付作者となった。やがて市川左団次と提携して四十二年自由劇場を結成、第一回「ジョンガブリエル・ボルクマン」試演以後（年二回の試演を含む）大正八年まで九回の公演を重ねて日本の新劇の夜明をつくり、その後ヨーロッパの演劇を実地に見学し、帰国後は一時映画に関係、大正十三年、土方与志と協力して築地小劇場を設立、翻訳劇や創作劇を上演したり俳優の養成につとめて新しい演劇術を日本に創造すべく尽力した。昭和二年ロシアに渡りモスクワ芸術座公演を観、それを小劇場の運動に生かそうとつとめたが、病のため果せず昭和三年十二月、心臓麻痺のため四十八歳の生涯を閉じた。

井上十吉は文久二壬戌年（一八六二）十一月二十六日、徳島県名東郡徳島字大岡に士族井上高格の次男に生まれた。旧藩主蜂須賀茂韶が藩の子弟を英国に留学させた時の留学候補の一人に選ばれ、彼十歳の明治六年四月英国に渡った。十一年九月ラグビースクールに入学、ついでキングス・カレッジに学び、更に官立鉱山学校の採鉱冶金学科を専攻、十六年帰国し鉱山技師になろうとしたが、転じて英語教育界に入った。明治十七年九月、東京大学予備門御用掛、十九年四月第一高等中学校教諭に任ぜられ、爾来二十六年まで凡そ七年二カ月英語教育に尽した。二十六年横浜のジャパン・ガゼット社で邦字新聞の翻訳、又外務省に入り翻訳官としてベルギー、アメリカ、スペイン公使官書記官となって活躍。大正七年一月、外務省を退いてからは、“Sketches of Tokyo Life”（明二六）“Home Life in Tokyo”（明四三）「仮名手本忠臣蔵」（同上）を洗練された英語で海外に紹

介する一方、もっぱら辞典の編纂に力を注ぎ「新訳和英辞典」「井上英和中辞典」など大小凡そ十種類の辞書を著わし、中でも「井上英和大辞典」「井上和英大辞典」などは名著として版を重ねた。晩年は井上通信英語学校を設立、「井上英語講義録」で学生の指導につとめたが、昭和四年四月胃癌で六十八歳の生涯を終えた。

龍峽樋口秀雄は、明治八年（一八七五）五月十四日、長野県飯田の旧家樋口与平の長男として生まれた。松本中学校、第一高等学校を経て明治三十年東京帝国大学文科大学哲学科に入学、社会学を専攻した。在学中「帝国文学」に関係し文学にも興味を持った。三十四年文壇に高山樗牛を中心に「美的生活論争」がおこると彼は「美的生活論」を就^て樗牛^{に与}等^で樗牛の説に反論し、以後社会学者として教壇に立つ傍ら文芸評論に筆を執り、「碧潮」（明三九）「時代と文芸」（明四三）を出版した。自然主義の風靡している文壇に於て「自然主義論」（明四二）「醒めたる自然主義」（同）らで自然主義の弱点を鋭く衝き、四十二年に後藤宙外、笹川臨風らと文芸革新会を結成して田山花袋、長谷川天溪と論争した。しかし文芸革新会解散を期に次第に文学から遠ざかり、四十四年には大隈重信主宰の雑誌「新日本」の主任となり、政治社会問題に携った。「近代思想の解剖」（大二）の他社会学の著書も多い。大正四年大隈内閣下の衆議院総選挙に当選し政界に入り、以後後半生を政治家として送った。昭和四年六月死去。享年五十四歳。

津田梅子は元治元年（一八六四）十二月三日、明治の農学開拓者津田仙の二女として江戸牛込で生まれた。七歳

の折開拓使募集の女子留学生として渡米、ジョージタウンのチャールズ・ランメン方に十年間滞在して、小学校と女学校を卒業し、明治十五年帰国した。華族女学校に奉職するうち、二十二年再度渡米留学、プリンマー・カレッジの選科生として生物学を専攻し、さらにオズウェイゴ―師範学校で教育学、教授法を聴講。二十五年帰国し華族女学校に再任、女子高等師範学校の教授を兼任した。三十三年（三六歳）本官並びに兼官を辞し、麴町一番町十五番地に女子英学塾を設立、女子に専門の教育を授けて英語教師としての学力を養うと共に、日本婦人の特性を育て、完き婦人の育成を目標とした。三十七年専門学校となり、翌年中等学校英語科教員無試験検定の特典を与えられた。こうして塾生の薰陶と塾の発展に精魂を傾け、多くの俊才を育くむかたわら、「国文化がたみ」ほか十一編の英書を編纂して英学生の手を計った。昭和四年八月、脳溢血で急逝した。享年六十五歳。（昭和女子大学近代文学研究室）

凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑、金子健二の四先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞおよろこび下さるであろう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い生徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、配置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した生徒は延三千名に上るが、その協力と、歳月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従って死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名